

令和4年度(2022年度)事業計画

事業概要

当法人は、昭和57年(1982年)、右京区龍安寺住吉町に「青少年の家キャンピング指月林」を開設し、纖維染色研究所を併設しております。事業場では、青少年を対象に道徳心のある情操豊かな人間性を養う研修・体験活動を提供する淳風美俗育成事業と纖維工業、染料工業への寄与を求めて、染色の科学的解明と研究成果の文献化を行う学術研究事業を肃々と継続しております。

淳風美俗育成事業は、研修・体験等を通して青少年の健全育成に資することを目的としております。後述する六つの個別プログラムにより、青少年が社会生活を営む上での普遍的な規範を自ら学び取ることを目指しています。

学術研究事業では、染色、染料及び色彩に関する研究等を行っています。纖維染色研究所に於ける研究を蓄積と染料植物園での染料植物の育成、保存、活用を目標としております。

これらの公益目的事業は、本年度も目標に沿った活動を行います。公益目的事業を支えるべき収益事業も従来どおり、公益目的事業に資するという限定目標のもと、不動産賃貸管理事業及び不動産賃貸事業を継続いたします。

公益目的事業の計画概要

1. 淳風美俗育成事業

キャンピング指月林敷地内にあるキャンプ場、研修棟、グランドや染料植物園（研修・体験用及び学術研究用）を活用し、青少年にとって自主的な活動体験となることに主眼を置いて、各プログラム活動を実行いたします。

過去2年間、新型コロナウイルスの変異と感染の拡大縮小には、当法人の公益目的事業の活動も大きな影響を受けました。

本年度は3回目のワクチン接種や医療体制の改善が進み、社会生活と経済活動がバランスを取りながら共に回復に向かうことを想定しています。活動においては、感染防止対策を緩めることなく、京都府の指標（感染警戒レベル）などの情報を注視しつつ、来場団体数、人数、日数がコロナ禍以前の規模に回復することを目指します。

新たな活動として、持続可能な開発目標（SDGs）について、積極的な取組みとその具体化を目指します。当法人では、SDGsの17ゴールのうち、ゴール12（つくる責任、つかう責任）に着目し、人・社会・環境・地域に配慮したものやしくみを選んで使用する活動（エシカル消費）に取り組みます。既に実施していることも多々

ありますが、「エシカル消費」の考え方を研修にも盛り込み、研修来場者に趣旨の説明する共にその理解を求めます。

個別プログラムの活動計画は次のとおりです。

① キャンピング研修

「自然の中での集団による活動・共同生活」を意識してもらうことに重きを置きます。事前準備と後片付けの徹底、新聞や木片を使っての火起こし、薪での野外料理、テント宿泊を通じて、グループ内での協力はもとより、天候の変化、道具器具の活用、危険回避などにも意識が向くような指導に努めます。

京都府の感染警戒レベルや自治体の対応等によってはテント泊を見合わせ、日帰りの野外活動のみとし、年30日の実施を見込みます。

② 瞑想研修

来場者全員の参加を得るように進めます。

複数回来場の場合、この時間を楽しみにするという青少年も増えてきました。初来場者には趣旨の説明とともに経験者の感想もお伝えします。実施前の講話にも工夫を凝らして当日の主目的に応じた内容とすることにより、体験に向けて気持ちの集中を高めるとともに、瞑想の習慣化を働きかけます。

室内の活動となるため、換気と時間の短縮にも留意します。また、ソーシャルディスタンスを確保するために1回の上限を20名とし、京都府の感染警戒レベル自治体の対応等によっては実施を見合わせます。

③ 茶道研修

「お茶に親しみ作法を学ぶ」という目的を踏まえ、実施の都度、対象者の年齢や経験に応じて、作法の意味するところ、茶道の精神、歴史など重点を決めて行う方法を継続します。

研修に当たり、密集回避のため10名を上限とします。指導者とも十分に協議して、一定の距離を保ちつつ対面を避けるなどの密接対策を徹底し、茶器等の複数回使用を不可とします。瞑想研修と同様に京都府の感染警戒レベル自治体の対応等を参考に、実施の可否を判断することもあります。

年6回の実施を計画します。

④ 作務研修

体験直後に「来たときよりも美しくなった」、「次の人のためにきれいにした」という達成感を感じてもらうことが成果と考えています。参加者の人員構成などを踏まえて、前に来た人たちが自分たちのためにどうしてくれたか、後に来る人たちのため自分たちに何ができるか、という連鎖を強く意識した内容となるよう努めます。

来場者全員の参加を求めます。

⑤ 草木染研修

草木染研修は年間を通して実施が可能で、時期によっては、草木染の染材として植栽している染料植物の見学、摘み取り、準備、染色までを一貫して体験できます。実施にあたっては、できるだけ季節に応じた染材を選ぶことによって印象に残る自然体験となることを目指します。草木染研修の体験効果を高めるため、染料植物園内の染材選択の幅を広げる実験とその資料の蓄積を日常的に継続しております。

屋外活動ではありますが、上限人数を 20 名程度とし、かつ 1 グループ 2~3 名に分かれて実施するなど、密集しにくい工夫をします。

年 12 回の開催を計画しております。

⑥ スポーツ研修

少年期の運動能力向上には、9~12 歳が最も大切で、この間に身に付けた能力は一生忘れず、また、その前後は、それぞれにふさわしい運動があるという理論を学習しながら、長期的な視線で取り組みます。一方で、運動する場所や機会に恵まれない団体も少なからずあるという当面の課題も無視できないものがあります。既設の鉄棒と新設した雲梯と併せて活動を進め、充実を図ります。

グランドの芝は、年度初めに全面張替が完了するので、より快適にスポーツに集中できる環境になります。コロナ禍で室内活動が制限されるなか、ニーズが増していることから、年 24 回の活動を目指します。

2. 学術研究事業

例年通り纖維染色に関する研究と染料植物園での染料植物の植栽を行います。

纖維染色に関する研究は、年 3 回開催する纖維染色委員会において、研究テーマや研究内容の協議、意見交換等を行って進めております。その研究成果を公表する「論文集薄光」は、第 34 号の発刊を計画しています。

染料植物園では、天然染色の材料となる樹木の維持管理、草花系及び野菜・根菜系植物の植栽とその収穫を行っております。収穫した染材（各植物の染色として使用する部位ごと）は草木染研修や研究のために、その保存を着実に進めてまいります。

(1) 纖維染色研究に関する研究

－ 本年度の研究テーマ －

- ① ログウッド染色セルロース系纖維の洗濯堅牢度
- ② ベンガラ色の視覚評価
- ③ 「片面紫蘇」の染色性の一考察　－イオン性吸着剤による色目への影響－

－ 各テーマの概要 －

① ここ数年は、最近のキーワードである SDGs に配慮し、セルロース系纖維(綿、レーヨン、アセテート)の天然染料であるログウッド抽出液による染色に着目し、主に染色・媒染条件の影響について検討を行ってきた。その結果、まず、通常分散染料により染色されるジアセテート纖維およびトリアセテート纖維でもログウッド抽出色素により染色および媒染が可能であることを報告した。ただ、それらの染色挙動および色目は綿やレーヨンのそれらとは大きく異なっていた。この差異は纖維内部の染着サイト(細孔)を形成する分子構造および環境の差異に起因し、染着サイトを構成する分子セグメント鎖と染着色素分子との相互作用の差異によるものであると推察された。さらに、昨年度にはジアセテート纖維での染色時に添加塩の種類を変えることで色目の異なる染色が可能であることも報告した。この現象も色素と塩構成分子とが形成する錯塩構造および錯塩が染着する染着サイトの形状および環境の違いに依存していると考えられた。

以上のように、使用したセルロース系纖維は同じセルロース分子骨格であるものの染着サイトとなる細孔および自由体積的分子間隙の形状および環境が異なることから、ログウッド抽出色素もそれぞれの染着サイトに応じた結合様式で染着しているものと考えられる。もし、纖維によって染着様式の差異があるならば、染色布の堅牢度にも重要な影響を及ぼすことは想像に難くない。そこで、本年度はこれまで報告してきたログウッド抽出色素で染色したセルロース系纖維を使用し、それらの洗濯堅牢度を調べることから、纖維内部の染着サイトの違いが堅牢度にどのように寄与しているかを明らかにするとともに、セルロース系纖維内に形成される染着サイトの形状および環境について考えてみることとした。

② 江戸時代、経(たて)に絹糸、緯(よこ)に木綿を用いた弁柄縞が輸入されたとされているが、日本列島での赤色のはじまりは、現在、旧石器時代まで遡ることができるという。最古の遺物としては、縄文時代に土器の着色にベンガラが使われていた。仏教伝来に伴い寺院伽藍(がらん)群の木部に赤いベンガラが塗装されるようになった。近世になると町家などの民家建造物の塗装にもベンガラが使われるようになった。京都の弁柄格子が代表の一つである。

日本の過去の文献資料や文化財を紐解くと、原料と製法が異なる 6 種類のベンガラが存在しているという。現在は、工業用ベンガラが主流で人工硫酸鉄を原料に化学的につくられており、鉄骨建材や船舶の船底さび止め塗料に使われている。

ベンガラの色は、暗い黄みの赤と言われているが、原料をそのまま、もしくは焼いて赤い発色を得てから、酸や不純物を取り除き、細かくすることにより、ベンガラはより濃く、鮮やかな色として安定する。原料は産地によって異なり、美濃赤坂の代赦(だいしゃ)、津軽藩赤土山の赤土、沖縄の久米赤土、久志赤土(くしのあかつち)、若狭ベンガラ、吹屋のローハベンガラ、大坂のダライベンガラなどが知られている。

今回は、岡山県の「吹屋」ベンガラを調査し、布地に染める工程により赤色の

見え方の違いを研究する。

③ 「紫蘇」は中国原産のシソ科シソ属の芳香性を有する一年草植物で、我が国においても平安時代から栽培が始まられたと言われ薬用などに多用された。「シソ」は品種が多く、本来は「赤ジソ」のことを言うが変種の「青ジソ」（大葉）などがある。染料植物園の畠エリアで栽培されている「シソ」は自然交配されたもので、葉の表が緑色、裏が赤紫色の「片面紫蘇」（マダラジソ）と言われるもので匂いはさほど強くない。

通常、赤ジソは梅漬けに使用されているように赤色素を含み、その色素成分の研究は行われアントシアニン系のシソニン、マロニロシソニンを多く含んでいることが知られているが、片面紫蘇に含まれる色素成分の詳細や染色における色目についての知見は研究報告も少なくほとんど知られていない。

「片面紫蘇」の葉内には赤系のアントシアニン以外に黄系のフラボノイド系色素も多く含有するため、その割合により色目が左右されることに注目した。本研究では、ペーパークロマトグラフィーを用いて色素成分を確認し、前年度の「楊梅の実」の研究で得られた知見を元に絹および和紙に対する染色性について分光測色により調べる。また、アニオン交換樹脂を用いて抽出液中のフラボノイド色素の分離を試み、その分離条件による試料の色目の変化を検討し、染色の幅広い利用に繋げる新たな知見を得たいと考えている。

（2）染料植物園

染料植物園は、樹木エリアと畠エリアに区分し、それぞれのエリアで天然染料となる染材を採取して草木染研修や学術研究事業に活用しています。樹木エリアでは、染材となる樹木を充実させるため、管理計画に従って剪定、植栽、補植等を適切に実施します。畠エリアでは、季節に応じた草花系、根菜系の染料植物を植栽し、葉、花弁、根などを染材として保存し、時期が合えば収穫体験を通して食育として活用します。

染料植物園は、各染料植物の名板や樹木プレートを設置しており、オリエンテーションやクイズなどで淳風美俗育成事業においても活用いたします。

II. 収益事業の計画概要

コロナ禍による影響は減少し、例年に近い水準に回復する見込みで、下記事業により公益目的事業の実施に必要な収益は継続して確保できる見込みです。

1. 不動産賃貸管理事業

管理物件数の見込 事業用建物 4棟

2. 不動産賃貸事業

賃貸物件数の見込 事業用土地 2件 以上